

# 和田先生との「出会い」を重ねて

橋本 二三男

私と和田先生との最初の出会いは、短歌でも大学入学後でもない。まだ同志社の学生だったころ、郷里の一年後輩が京都教育大に合格して、下宿したのが和田先生宅であったことから始まる。

彼が喫茶店で友人に「下宿を探しているんだが、どこかないかなあ」と話しているのが、たまたま近くの席におられた和田先生の奥さんに聞こえ、「うちへいらっしやい」とおっしゃった、その一言で決まった、という話を彼から聞いた。

彼の下宿に遊びにいっている間、私が和田先生にお会いしたのは一度だけで、挨拶程度の会話だったと記憶する。しかし、この下宿話に感動したこともあったが、高校時代、啄木の影響から短歌を作り、のちの「塔」同人、氷上寿夫氏に師事していたことや大学の授業が文学とはほど遠い、英語学であることに辟易していたことなどもあって、立命館大学の日本文学専攻に移ることを密かに決め、試験を受けて第三学年に編入学した。

もちろん和田ゼミに属したが、卒論のテーマは短歌ではなく、今まであまり研究されなかった近代作家であった。理由を言うところ「ぼくはあまりよく知らないから自由に取り組んでみたまえ」と言ってくれました。この卒論は、和田先生の推挙で『論究』第八

号に要約を載せていただいたが、研究を続けるだけの経済的余裕はなかった。

加えて、昭和32年は近年とよく似ていて、なべ底景気の就職難であった。やっと就職した私学では、生徒指導をめぐってワンマン校長と対立して辞表をたたきつけ、次の町工場は二年足らずで倒産した。軽食堂の出前をしながら悶々としているとき、一本の電話が和田先生から下宿にかかってきた。「どうしてる？ 立命館高校で講師の口があるんだが……」というお誘いが私のその後の人生を決定づけた。

ポトナム短歌会には、会史年譜によると昭和32年に初参加している。が、前述のような日曜も休日もない生活から自然と歌会から遠ざかってしまい、定職後も組合活動、学園紛争、役職等々で同じような隔絶のまま、定年まで来てしまった。詠んでも、学校行事の記念撮影的なものであった。

定年を機に健康診断をしておこうと思つて校医の紹介で受診すると、狭心症だから直ちに入院ということになったが手術中に心停止を起こし、肋骨二本、歯も二本折ったすえ蘇生した。こんなことがあつて、私の兄弟や子供たちが読めばいいと思つて、短歌

と詩とエッセイとによる自分史をワープロでまとめた。八十六歳でご活躍の和田先生には全くお笑い草であるが、その一冊を身辺外としてはただ一人先生だけに送った。「感銘しました。ゆつくり再読したいと思います。」というコメントとともに、『ポトナム』のバックナンバーが数冊同封されていた。入会せよというようなことは何も書かれていなかったが、私は一から勉強し直したい気持ちになって、昨年11月に入会した。実に四十数年ぶりの再入会であった。

この『ポトナム』誌を読んでいると、ご高齢にも拘らず、大阪の歌会、福知山の歌会へと飛び回っていらつしやるのに驚いた。何かお手伝いできればと思っているとき、「空きベッド待ちなんだが、手がすいていたら来てほしい」と連絡があつて、何かと六月十六日にお訪ねした。顔色もよく、電話にも出られていたが、机に向かうことはお腹を圧迫するからだろう、「言うから、言うとおりに書いてほしい」とおつしやつた。が、随想や論述ならともかく、詩歌に関することはその都度確認しなければ特殊な書き方がある。横になつておられる先生には返つてお疲れになると思つた。二日目、奥さんが「病院から十九日にベッドが空くとの連絡があつた」と言つて入つて来られた。私は「ぼくには勉強になります。効率は悪いし、先生のお体に障ります」と言つた。「ありがとう。残り少ないので明日気分のいい時にすませられる」とおつしやつた。これが私の聞いた先生のお声である。

和田先生は、その生涯を通じ、学問と思想信条には自らに厳し

く信念のお人であり、人々と歌の仕事に対しては寛容で誠実なお方であられた。「結局、技巧の問題ではなく、生きる姿勢の問題である」とおつしやつた通りの生涯であつた。私の人生は、もちろん多くの人々の支えがあつていま在るのであるが、危うい要所要所で、和田先生をおした見えざる手によつて導かれて来た気がしている。

私は、この後、七月中にまとめなければならぬ仕事に追われ、先生のご入院中は一度もお見舞いに行けなかつた。まさか一か月後の七月十六日に永遠のお別れをしなければならぬとは予想だにしなかつたので、痛恨の極みである。でも、歌の道では脱線つづきの不肖の弟子であるが、先生にはいつでも会える。先生の『微粒』から『越冬』に至る全八歌集のなかで、私の生あるかぎり先生との新しい「出合い」を重ねていけることは、私にとつてこの上ない幸せである。先生のご冥福を念じ上げつつ。

(はしもと・ふみお 元立命館中学校・高等学校長)